

九月二日

昨夜帰京。早速屋上に上る。雑草が予想以上に繁茂して野菜は埋もれがちになっていた。植物の生命力は凄いものだ。が、この生命力は大地から切り離された空中で発露されているわけで、いわば人工の土地をベースにしている。大地と言っても地球の断面図で考えれば土はほんの表皮一枚程度のものなのをおもった。

今朝再び屋上に上る。朝の光の中で見る菜園は繁茂したという状態をすでに通り返して荒廃した感じにさえなっていた。過剰さは不気味なだけだ。人の手が入らぬ自然の過剰さは危い。マアしかし小さな屋上菜園の荒廃過剰からそんな事考えちまう私つて者も馬鹿なんだね。しかし、たった二週間の不在で、こんなに植物が育ってしまうとは、子供の頃の原っぱの驚きと同じ様な驚きだった。

二階で、久し振りにくつろいでいたら、藤塚光政から電話があった。八時くらいか。毛綱モン太が今朝死んだと言うのだ。仰天を通り越して、一瞬時間が氷りついた。

毛綱と最期に会ったのは数年前の正月、深大寺のソバ屋で偶然にだった。黒い中原中也を想わせるようなマントを着て、しかし、それだけがいかにも毛綱らしい、なんと言うか周囲とは慣じまぬ、孤絶感があった。家族と一緒にだった。幸せそうにしていたが、普

通の親父を演じている毛綱を見て少し悲しかった。天才がこんなことしちやだめなんだとすぐに思った。私知っている三〇そこそこの天才毛綱はそこには居なかった。思い起せば私の方も家族づれだったのだから、「イヨイヨ、ギャング振り板に付いてきたな」と私を相変らず、からかう毛綱の方も、こんなところで家族とソバ喰うお前は見たくネエと思っていたのかも知れない。精彩が無かった。

最近の毛綱は精彩が無かった。

私知っている毛綱はキラキラとまぶしく輝やく者だった、才能というモノがあるとしたら間違いないこんなモノなんだろうと、私は毛綱に会う度に感じさせられていた。私の二〇代後半のほとんどはこの男との付き合いが全てであった。

「反住器」はそのまま「反近代」の旗印でもあった。私の二〇代三〇代はこの男の背中を眺めながら走ることに終止した。しかし、途中で私は追う事を止めた。東洋的シンボリズム、具体的には真言密教のマンダラをアイコンとして建築を構築しようとする毛綱の造形力の凄惨なエネルギーに、とても私の微々たる小才は追いつかぬ事を内心知っていたからだ。私は本来の私に戻った。

北国のゆうつと名付けられたプロジェクトがあつて、毛綱の、天才にありがちな深いメランコリーを良く表わしていた。密教への深い傾倒は直観的に南海の深いブルーのエロスを想わせるが、毛綱の天才はそれをも裏切った。毛綱は南海のエロスを北国のメランコリーに移動させたのだ。釧路市立博物館、湿原展示館等、釧路での幾つかの建築が毛綱の絶頂期の建築であった。天才特有の資質を持って、毛綱はそれ等を若い時に成し遂げてしまった。あまりにも強いシンボリズムは強烈に光り輝やくが命も短かった。短くしてしまっただのは戦後五〇年、徹底的にアメリカ化を自己推

進してきた、二セアメリカの居留地としての日本という悪場所だ。毛綱の鮮烈な才能、北国のゆううつは余りにも鮮烈であったが故に、押しつぶされ、踏みつぶされた。

しかし、何といても毛綱が毛綱である由縁は「反住器」だ。反住器によって毛綱は死ぬことがない。毛綱の、天才に特有な早熟振りを示して、余りあるこの住宅は、日本の小住宅がほとんど初めて世界の建築になって、しかも先頭を走っていた、稀有な一点である。

毛綱は無念だったろうと憶測する。

一時代を余りに短かったけれど画し、光り過ぎて続かず、最近モダン・リヴァイヴアルの群ばかりだ。私は毛綱に出会ったお陰で才能とは何かを知った。天才はやはり何処かに居るのだと知った。

モダン・リヴァイヴアルは歴史的必然なくしておきている。凡才の群によって後戻りさせられている。毛綱はそれを知っていただろう。「今に、バチ当たるぞ」と怒りを込めてつぶやいていた。雑魚の群、イワシの群の慣れ合いでモダン・リヴァイヴアルは引きずられている。

若い頃の真の友人だった毛綱の死は、私にとつても他人ごとではない。一日一日を大事に、しかも効率良く生きなければならぬ。無駄が無駄のママなのだ。私の特色は膨大な無駄だ。その大きな無駄をタダの無駄に終わらせぬ方法が必要で、その必要は切迫している。チョツとつかみかかつてはいるのだけれど。

毛綱が戦線から抜けてしまった。だんだん人数が減っていく。

午後、佐藤健の家に行く。佐藤健も体調を崩し、十月には手術だと言う。何と言う事だ。「阿弥陀の道」探検隊構想を聞く。龍

谷大学、仏教伝導協会と毎日新聞社の共同プロジェクトでタクラマカン砂漠を中心に天山南道、天山北道を巡り、西安、敦煌、樓蘭、クチャ、カシガル、ヤルカンド等を巡る計画で、インド、ペルシャも視野に入れた大計画だ。

原始仏教、大乘仏教をアシヨカ大王以前、以後と明快に説いて教えてくれた。年内は、この人物について仏教の勉強をする。岩波ジュニア新書 世界の宗教、日本の宗教、新潮文庫 日本仏教史、岩波新書 仏教入門、平凡社 キリスト教その本質とあらわれ、新潮選書 仏教とキリスト教、世界宗教事典、東京大学出版会 宗教学辞典、以上八冊渡される。一週間で読破できるか。ジュニア新書は中学生向けだから、読めるだろうが、十年早く始めていれば良かった。

「世界の宗教」から読み始める。

九月三日

朝刊に毛綱の死亡記事が小さくでていた。あつけないものだ。

九月三日のつづき

しかし、通夜の席で聞いたことだが、毛綱は五年前からガンでしかもそれを本人が知っていたのだと言う。家族にも、母親にも知らせるなど言っていたらしい。

私が深大寺で最期に会った毛綱は、だから自分で自分の行末を知っていた毛綱だったのだ。精彩が無いどころじゃなかった。しかも幸福そうだった家族はそれを知らなかった。俺の眼はフシ穴であった。